

| 学生海外調査研究                       |                                                               |
|--------------------------------|---------------------------------------------------------------|
| 19 世紀後半パリの区庁舎装飾画における「人生の諸段階」主題 |                                                               |
| 氏名 原田 佳織                       | 比較社会文化学専攻                                                     |
| 期間                             | 2016 年 12 月 11 日～2016 年 12 月 19 日                             |
| 場所                             | パリ（フランス）                                                      |
| 施設                             | プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室、パリ古文書館、ウジェーヌ・カリエール美術館、フランス国立図書館、オルセー美術館資料室 |

## 内容報告

### 1. 研究概要

#### 1.1 研究背景

報告者はこれまで 19 世紀末フランスの美術における象徴主義の傾向に目を向けるなかで、同時期の装飾画にみられる「人生の諸段階」(*les âges de la vie*) の主題に関心を抱いてきた。人間の生涯を数段階に分割して各年代の特徴を表す、この西洋美術に伝統的な主題は、19 世紀末西欧の美術において、しばしば連作やフリーズの形態を伴いながら流行した<sup>1</sup>。従来こうした作例は、世紀末美術に関する研究により、象徴主義の視点のもとで言及され、文学や音楽など様々な芸術にわたってこの時代に展開された「生命の循環」の考え方と結びつけられてきた<sup>2</sup>。その一方で、フランスの公共装飾画中に見いだせる作例については、第三共和政初期の美術行政や公的注文に関する研究のなかで少し触れられるにとどまっており、同時にそれらが、美術館を中心とした一般の鑑賞の対象から逸れてきたことも指摘できる<sup>3</sup>。しかし、これらの装飾画は、同時期の美術において「人生の諸段階」主題がどのような表出の仕方をしたのかを考えるうえで欠かせない作例である。実際、受容の側面から考えると、当時の区庁舎装飾画注文の過程で、その下絵などは、完成作の庁舎への設置前にサロンにて公の目に触れ、審査を受けており、同時代の他の画家や批評家に対して影響を及ぼし得る、重要な作品であった。

パリ市に提出された、こうした装飾画の下絵を現在所蔵するプティ・パレ（パリ市立美術館）は、第三共和政の公共装飾事業を見直す動きのなかで、1986 年に *Triomphe des mairies*（「区庁舎の勝利」）と題する展覧会を開き、パリ市庁舎内部の装飾画とともに、パリとその周囲の地域の区庁舎装飾画について、それらの注文から同時代の受容までに関する一次資料の調査にもとづいた基礎的研究の成果を公開している<sup>4</sup>。

この成果とプティ・パレ所蔵の下絵をもとにした事前調査において、本研究では、これらの区庁舎装飾画のなかに「人生の諸段階」と関わる作品が数十点みつかること、またその多くが婚姻の間装飾であったことに着目した。第三共和政初期に装飾された、これらの区庁舎が当時、世俗の生活様式のなかの祝祭の場として機能し、その装飾画が市民精神の高揚という目的を有したことを考慮すると、「人生の諸段階」主題の装飾画は、宗教的儀式に代わる新たな世俗的挙行の場のためという理念のもとで描かれたことが推察される。先行研究によって、第三共和政期の装飾画にみられる寓意が人々の生活とその実感に接近してゆく点や、宗教に代わる新たな倫理としての市民精神の寓意が描かれた点は指摘されている<sup>5</sup>。しかし、本調査のコーパスをなす作品において、主題の扱い方は多岐にわたっており、季節や一日の時間と重ね合わせて寓意的に表すものや、結婚や家族、仕事というテーマとの関連、さらに共和国やそのもとでの市民生活の理念をより直截に示したものなど様々である。また、先述の展覧会時に扱われた区庁舎装飾画は全体の一部分であったため、まず対象装飾画について一次資料の調査と収集を現地の資料室で行う必要がある。

本研究では、こうした装飾画の主題のあり方を同時代に位置づけることを目標とし、それらが、装飾画コンクールと公的注文の際に如何にして選択され、当時の人々にどのように受容されたのかを明らかにしてゆくことを目指す。なお今回の海外調査では、主にコンクールと注文の側面から資料収集を試みた。

#### 1.2 調査内容

上記の目的のために本調査では、パリの古文書館を中心として、次の5つの施設において文献および図像資料の収集を行った。

まずプティ・パレ（パリ市立美術館）資料室（Centre de ressources documentaires, Petit Palais, Musée des Beaux-Arts de la Ville de Paris）では、先に述べた1986年の *Le triomphe des mairies*（区庁舎の勝利）展のアーカイブと、同館の所蔵する装飾画下絵の関連資料を予約のうえで閲覧し、装飾画の注文やコンクール実施に関わる、一部の一次資料や作品図版を調査した。次にパリ古文書館（Archives de Paris）において、事前に担当者からメールで送付していただいた目録から選択し、パリ市とその周辺区域の区庁舎装飾事業のアーカイブを閲覧して、書簡やコンクール報告書、プログラム、図面、議事録などの資料を調査し撮影を行った。また、オルセー美術館資料室（Documentation de la conservation, Musée d'Orsay）では、各装飾画の作者である画家の資料ボックスを閲覧し、経歴や関係作品について調査した。フランス国立図書館（Bibliothèque nationale de France）では、一次資料として、一部の装飾画コンクール報告書など装飾事業関連の資料や、雑誌、新聞などに掲載された批評記事を調査し、そのほかに二次文献として、この装飾事業や各作品を扱った先行研究、展覧会図録と、「人生の諸段階」主題をめぐる研究など最新の研究状況の調査を行った。

以上に加えて、カリエール美術館（Musée Eugène Carrière）において、同時期のパリ12区庁舎祝祭の間の装飾画として描かれながら未完となった、カリエールの「人生の諸段階」連作（パリ、プティ・パレ）を中心として資料調査を行った。同館は通常、企画展示期間の日曜午後に限って開館されている。今回の調査では、報告者が以前からメールで情報提供をいただいていた代表者グラチエ氏より事前に許可をいただいて、カリエールを中心とした作品の展示を、同館を運営する友の会のメンバーの一人と彼女のご案内のもとで視察させていただき、その後、カリエールと同時代の文献や展覧会図録などを所蔵している同館のアーカイブにて、上記の調査を行い、さらに同館出版の紀要などの研究状況を教えていただいた。

## 2. 調査成果

### 2.1 区庁舎装飾事業と各画家の作例

#### 2.1.1 プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室の資料閲覧

まず、*Triomphe des mairies* 展（1896年）のアーカイブからは、展覧会時とその後にかけて、同館による調査の対象とされた区庁舎の装飾画についての一次資料のレファレンスと、一部の一次資料の写しが得られた。とくに、区庁舎および装飾画の作者ごとに整理されたファイルからは、以下に記す画家による装飾画の作例について、その注文、設置をめぐる行政文書や、図像プログラム、コンクール報告書などを得ることができた。これらの資料は、下記のパリ古文書館の調査成果と併せて、今後の論文執筆のなかで、各作品における主題の表現のされ方や、それぞれの制作状況などの背景を研究してゆく際に不可欠なものとなった。なお特筆される事柄については、本報告書の2.1.3項で述べたい。

- ①レオン・コメール（1850-1916）パリ4区庁舎装飾画、15区庁舎装飾画応募下絵
- ②エミール・レヴィ（1826-1890）パリ7区庁舎装飾画、19区庁舎装飾応募下絵、16区庁舎装飾画
- ③ディオジュース・マイヤール（1840-1926）パリ19区庁舎装飾応募下絵
- ④オスカー・マチュー（1845-1881）クリシー庁舎装飾画
- ⑤ポール・ミリエ（1844-1918）サン・モール庁舎装飾応募下絵
- ⑥アルベール・ベナール（1849-1934）パリ19区庁舎装飾応募下絵、1区庁舎装飾画

また、展覧会時に図録と別に作成されたリーフレットからは、その際に採られた展示構成を知ることができ、様々な装飾画の傾向が、伝統的寓意、「現実的」寓意、モデルニテ、象徴主義、アール・ヌーヴォーといった視点から分類されている点は、それぞれの作品分析の参考とすることができる。

#### 2.1.2 フランス国立図書館およびオルセー美術館資料室での調査研究

フランス国立図書館における調査では、装飾画の作者のなかでヴィクトール・プルヴェーやモーリス・シャバなどの画家に関する研究を閲覧し、さらにその作品批評について、雑誌、新聞から調査を試みた。同時代の受容の状況を知るために批評記事を調査することは、本研究にとって重要であるが、今回の調査では非常に部分的な収集に限られたため、今後まとまった調査が必要となってくる。そのほかに、パリの区庁舎建築に関する基本的な二次文献や<sup>6</sup>、それぞれの装飾画における主題の表現の仕方を考えてゆくにあたって必要となる、当時のフランス社会における政教分離や、また生物変異論の考え方などについても参考文献にあたり<sup>7</sup>、背景となった状況を知ることができた。

また、オルセー美術館資料室では、本研究のコーパスのなかで、区庁舎装飾画における主題の扱い方を比較してゆくために必要となる、各作者の情報を調べた。ここで対象とした画家の一覧は、参考文献欄に記載している。各区庁舎の装飾画、あるいはそのコンクールに応募した下絵の作者である画

家には、現在ではあまり名の知られていない画家も含まれる。今回の研究では、そのような画家の略歴だけでなく、現在の研究状況や、他の作品と区庁舎装飾画との関連などを知ることができ、短時間ながら有意義な調査となった。

### 2.1.3 パリ古文書館の調査成果

今回のパリ古文書館における調査では、区庁舎装飾事業のアーカイヴから、以下の庁舎の装飾を対象として、一次資料の調査を行った。以下の一覧に、各庁舎と、対象となる装飾画の作者を記す。ここで収集できた資料は主に、装飾画の設置と注文を決める、セヌ県美術局の審議録や美術委員会議事録、県や市の命令文書のほかに、装飾画コンクールの報告書、図面や目録、書簡などが含まれる。とりわけ議事録やコンクール報告書からは、各コンクールの際の審査委員会メンバーや審査経過、その際に発せられた意見などを知ることができた。

①1883年、4区、15区、20区庁舎の装飾画コンクール

②1区庁舎（アルベール・ベナール）

③4区庁舎（レオン・コメール）

④13区庁舎（ギュスターヴ・ブーランジェ）

⑤14区庁舎（アドリアン・タヌー、ジョルジュ・ルーセル）

⑥16区庁舎（エミール・レヴィ）

⑦19区庁舎（アルベール・ベナール、エミール・レヴィ、ディオジェーヌ・マイヤール）

⑧アルキュイユ＝カシャン及びノジャン＝シュル＝マルヌの庁舎（アンリ・ブランツ）

⑨クリシー庁舎（オスカー・マチュー）

⑩イッシー＝レ＝ムリノー庁舎（ヴィクトール・プルヴェ）

⑪サン＝モール庁舎（ポール・ミリエ）

区庁舎装飾事業のなかで「人生の諸段階」主題の関連作は、全く同一の題を有するものではない。直接的な題の作例として、アルベール・ベナールによるパリ1区庁舎婚姻の間装飾画《春／人生の朝》《夏／人生の正午》《冬／人生の夜》（1883年）や、ヴィクトール・プルヴェによるイッシー＝レ＝ムリノー庁舎正面階段装飾画《人生》（1896年）などが挙げられる。主題を最も直接的に表した作例である、オスカー・マチューによるクリシー庁舎婚姻の間扉上装飾画《市民生活の寓意》（1877年）では、寓意的な表現によって、誕生、勉学、くじ引き、求婚、労働・豊作・豊穰、選挙、死というテーマがそれぞれ表され、とりわけ誕生と死の場面には、19世紀半ばフランスの民衆版画などにみられた「人生の諸段階」主題を想起させるような典型的描写がなされ、さらに共和政のもとでの市民生活の理念と組み合わせられている。

これらの装飾画は、パリ市あるいはセヌ県によって、そのもとに置かれた美術委員会から、画家に直接依頼される場合と、1879年に開始されたコンクールの結果採用された場合がある。開始以降コンクールが普及したが、部分的な装飾は直接注文の場合が多く、また注文の場合でも以前行われたコンクールで3位までの入賞をした画家が採用されるという審査の方式が成立した。こうした装飾画に「人生の諸段階」のテーマが込められる場合、とりわけ婚姻の間の場合に多いのは、場に適した結婚や家族という主題を含めて、一連のパネルを構成するというケースであり、また祝祭の間や正面階段を含め、区庁舎に求められた、共和政の体制称揚や地域的アイデンティティに資するため、祖国や豊穰の主題とともに人生の経過が絵画化されるものが多くみられた。

コンクール報告書からは、審査員がどのような評価を行ったかが明らかとなった。その例として、4区庁舎祝祭の間、レオン・コメールによる装飾画（1883年）は、コンクールの際、2位となったアルベール・ベナールと接戦の末選ばれた<sup>8</sup>。コメールは、四季や水などのエレメント、また運命、富、豊穰、科学、芸術といった伝統的な寓意像の表現を用いるなかで、青春から老年に至る人の生涯を四季と重ねて描き、伝統的な表現を優雅に行ったことが評価された。それに対し、印象派などの作品によって当時普及していたような近代生活のテーマを描いたベナールは、装飾画における新しい表現という点で評価を受け、その後、先述のパリ1区庁舎の装飾画を注文されることとなった。ベナール自身は、1879年のパリ19区庁舎婚姻の間装飾画のコンクールにおいても、共和国の勝利や豊穰のテーマのほかに、四季の寓意像と生涯のなかの時期を、それぞれ重ね合わせる描写を既に行っていたが、結果としては、寓意像よりも場面描写によってテーマを表す表現が採用されることになったといえる。

公共装飾画の分野で活躍したベナールは、その後審査員としての役割を果たした、1888年の14区庁舎装飾画のコンクール報告書において次のように述べている。「新たな壁画の様式をいまだ見つけられなかったと私は言った。というのも、家族、家庭の守り、自由、平等、友愛といった概念を使い果たしてしまったとき、それらすべてを含むような哲学的観念を湧き起こすためには、どの程度それらを混合したらよいのか...（中略）...確かなのは、あるとき我々は、これほど波乱に富んでいて知的な生活の、はっきりとしたイメージを持ち得るということだ。このような啓示は、議員の方々...（中略）

…あなた方の主導性によって得ることができるのです。一言で言えば、あなた方がその装飾された壁面に見たいと願う主題をお与え下さい。」<sup>9</sup> ベナール自身、新たな装飾画の必要を感じ、革命的な理念を源泉とする、第三共和政の理念を支える概念を表す、という従来の方法に対して、その表現が枯渇していったときに、どのように新たな表現を見出すことができるのかと問い、そのための要望を述べている。ここでは、当時の生活における現実性を、装飾画に表すことが、コンクール主題次第で可能になると述べているようにも考えられる。先述のように、装飾画の大まかな傾向として、寓意や神話の表現といった古典的な様式の模倣から、同時代の現実生活を想起させる場面描写が増えたことを指摘できるが、表された理念や描写は、この時期の公共装飾画に要請されたものであった。今後の研究においては、今回収集することのできた資料も用いて、各装飾画の制作の際に画家の置かれた状況をより詳しく検討してゆく必要がある。

## 2.2 ウジェーヌ・カリエール「人生の諸段階」連作をめぐって

### 2.2.1 カリエール美術館のアーカイヴ調査

ウジェーヌ・カリエール「人生の諸段階」連作は、《若い母親たち》《婚約者》《生誕》(未完)《老人たち》(未完)の4点で構成されており、先の2点が縦長、残り2点が横長(高さはいずれもほぼ同じ)という形態をしている。パリ12区庁舎祝祭の間のためにカリエールへ注文され、1897年から1906年に画家が没するまで制作が続けられた。本調査では、この連作について、まずカリエール美術館アーカイヴでカリエール宛書簡の検索をさせていただくことによって、次の6点の手紙の写しを調査し、連作の注文と制作を取り巻く状況の一部を、正確な日付とともに明らかにすることができた<sup>10</sup>。

①1897年11月25日付、カリエールからギュスターヴ・ジェフロワ宛の手紙：

カリエールは12区庁舎のための注文が自身に決定されたことを市の発表によって知り、これは貴方のおかげであると深い感謝を伝えており<sup>11</sup>、この推薦に際し、友人の批評家ジェフロワが何らかの役割を果たした可能性があることが分かる。

②1899年2月10日付、ジョルジュ・ヴェラからカリエール宛の書簡：

部局長ヴェラは、12区庁舎のためのカリエールの装飾画下絵に関する、美術委員会の検討内容を伝えている<sup>12</sup>。これによれば、まずブラウンによって、カリエールからの手紙における説明、すなわち、下絵には「セピア調」の色彩を用いているが、完成作ではより見やすく、現実感を伴って主題が吟味され得るだろうという内容が伝えられた。そして委員会は、作品に高尚な芸術の印象を認めながらも、さらに、人物像を実物大以下の大きさに変更すべきであるという留保を示したうえで、カリエールの下絵を承認した。

③1900年2月9日付、美術局長ラルフ・ブラウンからカリエール宛書簡：

ブラウンは、12区庁舎のためにカリエールが制作中の装飾画の正確なタイトルを尋ねている<sup>13</sup>。

④1904年9月12日付、ティエボー＝シッソンからカリエール宛書簡：

美術批評家ティエボー＝シッソンは、カリエールがルイイ地区すなわち12区の庁舎装飾画注文を受け、4点のうち既に2点は完成したと聞いて、それらを観ることができるか、また扱われた主題など何か情報をもらえないかと尋ねている<sup>14</sup>。

⑤1904年12月2日付、フォンテーヌ夫人宛の手紙：

カリエールは、新たな肖像画の注文を受けることは難しいと伝え、その理由として、区庁舎のための装飾画を仕上げたいからだと述べており<sup>15</sup>、この時期も制作に取り組んでいたことが分かる。

⑥1905年7月26日付、J.ベルネームからカリエール宛の手紙：

画商ジョス・ベルネーム＝ジュヌはカリエールからの手紙に答えて、貴方の見事な装飾画がほとんど完成するところまでいったことを思い浮かべてとても嬉しい、ルイイ(12区)の庁舎は今後有名になるだろう、と書いており<sup>16</sup>、この頃にはカリエールの作品が完成間近であったことがうかがえる。

### 2.2.2 パリ古文書館の調査成果

続けて、この連作の注文をめぐる状況を詳しく知るために、先述のパリ古文書館においても、12区庁舎の装飾事業関連の一次資料を調査し、カリエールへの注文とその後について、さらに下記の資料を収集することができた。

①図面：

カリエールが装飾を依頼された当時に作成された、パリ12区庁舎祝祭の間壁面の図面からは、あらかじめ四面が規定され、それぞれに装飾枠と、壁画より下段部分の装飾的構成が設定されていたことが分かり、内寸は画家が制作したものと同一であった。

②事業関連文書：

カリエールへの壁画注文を決定し、寸法と報酬を規定した1897年11月19日付の委員会審議録、建築家による報告書や、1906年に画家が亡くなる前後の時期に交わされた関係者間の書簡を得ることができた。

前項のような書簡などの調査を進めてゆくことと併せて、これらの資料からは、注文時の制約がどの程度であったのか、また主題選択とその表現が画家の自由に任されているが、委員会の要求や周囲の助言がどのような点でなされたのか、といった制作の背景を知ることができる重要なものとなった。

カリエールの本連作は、1906年に画家が没したことで未完となったが、本報告書の2.1項で述べた他の装飾画と同様に区庁舎装飾事業の一環として注文されたものである。本調査で扱った「人生の諸段階」関連作の多くが、区庁舎婚姻の間装飾として注文されたのに対し、本作は、婚姻の間とは別に造られた祝祭の間の装飾画として描かれており、現在のところ、注文の際にその主題が規定された様子は見つかっていない。また、先述のオスカー・マチューによる作品のような、人間の誕生から死までの諸段階を扱う主題に比べて、本作は「人生の諸段階」と題されながらも、四場面の選択の仕方が特異である。とりわけ題に宗教的含意のある《生誕》を含め、《若い母親たち》《老人たち》の場面に嬰兒が描かれていることから、子供や世代間の相互関係という主題への画家の関心など、注文の文脈のみでは語ることはできない要素も多い。こうした主題の扱いや描写の特質は、象徴主義の流れのなかで指摘される同時代の作品の特徴とも並行しているものであり、カリエールによる本作は、第三共和政期の社会背景と、19世紀末にみられた象徴主義美術の傾向との結節点にあるといえることができる。こうした側面は、今後の研究において、作品に類似点の多い、アルベール・ベナールやヴィクトール・ブルヴェらの作例との比較を含め、より詳細に検討してゆきたい。

### 3. 今後の課題

以上によって、主に注文、審査の側面から、第三共和政期に制作されたパリとその周辺の区庁舎装飾画における、「人生の諸段階」の主題関連作の基礎的な調査を、概ね完了することができた。残された調査は、各庁舎ごとに完成作の状態や保管資料を調べることで、さらに他のアーカイヴにおいて、個別の資料を収集し、主に制作の状況を明らかにしてゆくことであり、また、同時代の受容については、今後、定期刊行物に掲載された批評などの調査を進めてゆきたい。

今回収集できた一次資料は、今後の研究のなかで作品分析を進める際に、非常に重要な資料となる。第三共和政期の装飾画に表された共和国の理念や、家族、家庭といった概念が、この主題とどのように結びついているか、主題が個々の作品にどのように表現されたのかといった観点による分析は、これらの資料をもとに実証的に深めてゆき、各作品を同時代へ位置づける助けとしたい。

本調査は、主として博士論文の第一章に活かすことができるだけでなく、博士論文全体の構成に対して有意義な知見をもたらすものとなった。この調査成果をもとに研究を深め、その一部は美術史学会あるいは日仏美術学会において発表してゆきたいと考えている。

### 4. 謝辞

本調査では、一週間に満たない限られた時間のなかで、現地に赴くことでしか得られない資料閲覧と研究の深化の機会をいただきました。国際的な女性リーダーの育成を旨とする本プログラムにより、このようなご支援をいただいたことに感謝いたします。

また、調査の実施にあたりご協力を賜りました各資料室の皆様、そして貴重な情報をご提供下さいました松田光司氏、大変価値の有る資料をご提供下さいました Sylvie Le Gratiet 氏に心より御礼申し上げます。

### 注

1. 代表的な例に、エドヴァルド・ムンク「生命のフリーズ」連作（1892-1944年頃）やポール・ゴーギャン《我々はどこから来たのか、我々は誰なのか、我々はどこへ行くのか》（1897-98年）、ジョーヴァンニ・セガンティーニ「自然」三連画（1896-1899年）などが挙げられる。
2. *Paradis perdu : l'Europe symboliste*, cat.exp., Montréal : Musée des beaux-arts de Montréal, Paris : Flammarion, 1995, Guy Cogeval, « Les cycles de la vie », pp.303-313. / Emmanuel Pernoud, *et.al.*, *L'Enfant dans la peinture*, Paris : Citadelles & Mazenod, 2011, p.326.
3. Pierre Vaisse, *La Troisième République et les peintres*, Paris : Flammarion, 1995, pp. 284-289. / Christian Amalvi, *La République en Scène : les décors des mairies parisiennes, 1873-1914*, Action artistique de la ville de Paris, 2006.
4. *Le triomphe des mairies : Grands décors républicains à Paris, 1870-1914*, Paris : Musée du Petit Palais, 1986, Thérèse Burollet, “Prolégomène à l'étude du mur républicain”, pp.22-42, Frank Folliot, “Les Décors de mairies : origine et evolution”, pp.54-61.

5. Thérèse Burolet, *ibid.*
6. *Paris : Direction générale de l'information et de la communication: Votre mairie, son histoire*, v.1~20, Paris : Mairie de Paris, 1992.
7. Isabelle Poutrin, dir., *Le XIXe siècle, politique et tradition*, préf. d'Alain Corbin, Paris : Berger-Levrault, 1995, Jean Baubérot, "La Laïcité, une invention française", pp. 493-508, Daniel Becquemont, "Du transformisme au darwinisme", pp.5-20.
8. F. Hattat, *Concours de peinture pour la décoration artistique des mairies des IV<sup>e</sup>, XV<sup>e</sup>, XX<sup>e</sup>, arrondissements : Rapport général sur les opérations du jury, M. F. Hattat, rapporteur*, Paris : Chaix, 1883.
9. Albert Besnard, *Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIV<sup>e</sup> arrondissement : Rapport sur les opérations du jury, M. Besnard, rapporteur*, Paris : Chaix, 1891.
10. このうち①ジェフロワの手紙(註11)は、既に次の論文で明らかにされている。Sylvie Le Gratiot, "De *L'Eveil* aux *Âges de la vie*, Conception et réception des décors d'Eugène Carrière", *l'Atelier*, bulletin de l'Association "Le Temps d'Albert Besnard", no.8 "Le grand décor parisien à la fin du XIXe siècle", 2013.
11. Archives municipales de Nancy, Fonds de l'Académie Goncourt, lettre d'Eugène Carrière à Gustave Geffroy, 25 novembre 1897. ナンシー市のゴンクール関係アーカイブにカリエールに関する資料が含まれている。このほかにカリエール美術館所蔵の、日本美術に関するゴンクールの著書で、見返しに「ウジェーヌ・カリエールへ 友情の印に エドモン・ド・ゴンクール」と記された、次の資料を見せていただいた。Edmond de Goncourt, *Hokousai : l'art japonais au XVIII<sup>e</sup> siècle*, Paris : Bibliothèque-Charpentier, 1896.
12. Archives au Musée Eugène Carrière, lettre de Georges Veyrat à Eugène Carrière, 10 février 1899, Bibliothèque des Musées nationaux, « Commission : J.P.Laurens (président), Bouvard, Brown, Baudouin, Veyrat (secrétaire), Bourgeois (secrétaire-adjoint) ».
13. Bibliothèque des Musées nationaux, F°397, lettre de Ralph Brown à Eugène Carrière, 9 février 1900.
14. Bibliothèque des Musées nationaux, Fonds Carrière, MS 425(2), lettre de Thiébault Sisson à Eugène Carrière, F°14, 12 septembre 1904.
15. Eugène Carrière, *Ecrits et lettres choisies*, Jean Delvolvé ed., Paris : Société du Mercure de France, 1907, pp.303-304, lettre d'Eugène Carrière à Mme Arthur Fontaine, 2 décembre 1904.
16. Bibliothèque des Musées Nationaux, lettre de J. Bernheim à Eugène Carrière, 26 juillet 1905.

## 参考文献

※主要資料名のみ掲載

プティ・パレ（パリ市立美術館）資料室 Petit Palais, Centre de ressources documentaires

Archives d'exposition : Le triomphe des mairies, 1986

Documentation : Albert Besnard, Léon Comerre, Félix et Jacques Jobbé-Juval, Emile Lévy, Diogène Maillart, Oscar Mathieu, Paul Milliet, Victor Prouvé

オルセー美術館資料室 Musée d'Orsay, Documentation

Documentation : Paul Baudouin, Albert Besnard, Emile Blanchon, Gustave Boulanger, Alfred Bramtot, Maurice Chabas, Léon Comerre, Fernand Cormon, Ernest Delahaye, François Délobbe, Henri Gervex, François Gorguet, Georges Hervy, Ferdinand Humbert, Félix Jobbé-Duval, Jacques Jobbé-Duval, François Lafon, Pierre Lagarde, Emile Lévy, Oscar Mathieu, Georges Moreau de Tours, Victor Prouvé

パリ古文書館 Archives de Paris

Préfecture de la Seine, Direction des Beaux-Arts et de l'Architecture, Bibliothèques et Beaux-Arts, 1812-1962

Travaux d'équipement et de décoration, Mairies d'arrondissement ; Mairies de banlieue

VR 560-562, 564, 566-569

区庁舎装飾事業一次資料

*Concours pour l'exécution de Travaux de peinture dans divers édifices municipaux, Programme*, Paris : Chaix, le 22 septembre 1879.

*Extrait du registre des procès-verbaux des séances du Conseil Municipal de Paris*, Séance du 16 juillet 1883.

F. Hattat, *Concours de peinture pour la décoration artistique des mairies des IV<sup>e</sup>, XV<sup>e</sup>, XX<sup>e</sup>, arrondissements : Rapport général sur les opérations du jury, M. F. Hattat, rapporteur*, Paris : Chaix, 1883.

*Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIV<sup>e</sup> arrondissement, Programme*, le 1<sup>er</sup> décembre 1888.

*Extrait du registre des procès-verbaux des séances du Conseil Municipal de la Ville de Paris*, séance du 21 novembre 1888.

Albert Besnard, *Concours pour la décoration de la salle des mariages de la mairie du XIV<sup>e</sup> arrondissement : Rapport sur les opérations du jury*, M. Besnard, rapporteur, Paris : Chaix, 1891.

#### 二次文献

Amalvi (2006) : Christian Amalvi, *La République en Scène : les décors des mairies parisiennes, 1873-1914*, Action artistique de la ville de Paris, 2006.

Mairie de Paris (1992) : *Paris : Direction générale de l'information et de la communication: Votre mairie, son histoire*, v.1~20, Paris : Mairie de Paris, 1992.

Poutrin (1995) : Isabelle Poutrin, dir., *Le XIX<sup>e</sup> siècle, politique et tradition*, préf. d'Alain Corbin, Paris : Berger-Levrault, 1995.

Prouvé (1958) : Madeleine Prouvé, *Victor Prouvé, 1858-1943*, Paris : Berger-Levrault, 1958.

Vaisse (1995) : Pierre Vaisse, *La Troisième République et les peintres*, Paris : Flammarion, 1995.

Vaisse (1977) : Pierre Vaisse, “Styles et sujets dans la peinture officielle de la III<sup>e</sup> République : Ferdinand Humbert au Panthéon”, communication, séance du 3 décembre 1977, *Bulletin de la Société de l'histoire de l'art français*, 1977, pp.297-311.

*Le Triomphe des mairies : grands décors républicains à Paris, 1870-1914*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1986.

*Quand Paris dansait avec Marianne*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 1989.

*“L'enrôlement des volontaires de 1792-1899”, Thomas Couture, 1815-1879 : les artistes au service de la patrie en danger*, cat.exp., Beauvais : Musée départemental de l'Oise, 1989.

*Henri Gervex, 1852-1929*, cat.exp., Paris : Musée Carnavalet, Bordeaux : Galerie des beaux-arts, Nice : Musée des beaux-arts, 1992.

*Paradis perdus : l'Europe symboliste*, cat.exp., Montréal : Musée des beaux-arts de Montréal, Paris : Flammarion, 1995.

*Peinture et Art nouveau, l'Ecole de Nancy*, cat.exp., Nancy : Musée des Beaux-Arts de Nancy, Paris : Réunion des musées nationaux, 1999.

*Roger Marx, un critique aux côtés de Gallé, Monet, Rodin, Gauguin*, cat.exp., Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Musée de l'École de Nancy, 2006.

*Victor Prouvé : 1858-1934*, cat.exp., Paris : Gallimard, Nancy : Musée des beaux-arts de Nancy, Musée de l'école de Nancy et Musée Lorrain, 2008.

*Maurice Chabas, peintre et messager spirituel, 1862-1947*, cat.exp., Paris : Somogy, Pont-Aven : Musée de Pont-Aven, Bourgoin-Jallieu : Musée de Bourgoin-Jallieu, 2009.

*Théâtres et cafés : peintures et décors à Lyon, 1840-1930*, cat.exp., Villefranche-sur-Saône : Musée Paul-Dini, 2014

*Albert Besnard, 1849-1934 : modernités Belle Epoque*, cat.exp., Paris : Musée du Petit Palais, 2016.

はらだ かおり／お茶の水女子大学大学院 人間文化創成科学研究科 比較社会文化学専攻

#### 指導教員によるコメント

原田さんは、自身の博士論文の研究テーマに基づき、報告書に示されているとおり、非常に明確かつ具体的な研究目的と調査方法、調査場所を認識し、基本的な予備調査はもとより、関係諸機関への事前連絡などその下準備を十分に行った上で今回の調査を実施している。その結果、無駄なく時間と資金を使って短期間の調査としては十二分な成果を挙げており、とりわけ調査先の研究者と良好なコミュニケーションを取ることによって、一般にアクセスできる以上の資料や情報を得ることができており、その専門的な意義は大きいと言える。また調査の結果得られた知見についての考察においても、適切な見解を示しており、今後の研究の展開の見通しや方向性も明確に得ることができている。本学の貴重な研究助成に支えられて実施された調査研究としては、それに十分ふさわしい実施の実態と成果が得られたことが報告書から読み取れ、非常に意義のある調査研究であったと言える。

(基幹研究院人文科学系・教授 天野知香)

## **Theme of “ages of life” in decorative paintings inside town halls of Parisian arrondissements in the second half of the 19<sup>th</sup> century**

Kaori HARADA

This study asks why the theme of “the ages of life” is found in the different decorative paintings inside the town halls of Parisian arrondissements created during the early French Third Republic. This research examined these variations of the traditional theme in the Western art history in the context of their creation and their reception.

Our research on primary sources at the Parisian Archives found many records that indicate the contemporary conditions surrounding each of these paintings including allegoric or realistic representations. The results will be essential for the analysis of these representations in our doctoral thesis and also contribute to the study on Symbolism in the 19<sup>th</sup> century art.